

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 廖 肇亨

本論文は、仏教が士人の精神や文学にとりわけ大きな影響を与えた時代の一つである17世紀、明末清初の時期における、仏教と文学の関係がテーマである。

序論では、明代において詩学と禅学とをつないだと見られる重要な著作、宋の嚴羽の『滄浪詩話』を手掛りに、この書物が明代のさまざまな文学者にどのように受け止められたかを通して、この時代の文学と仏教の関係を鳥瞰している。

第一章では、明末清初の知識人の一般的な心性を問題にし、「狂」「情」をキーワードにして、その仏教との接近の様相を明らかにし、あわせて出家が持った政治的意義についても論じている。第二章は、明末清初の僧侶たちが、どのような文学観を抱いていたかについての考察。

第三章、第四章では、明末清初の知識人（非僧侶）の文芸理論において、仏教がどのような役割を果たしているかを、吳中文苑、古文辞派、性靈派の各グループ、そして錢謙益、金聖嘆、王漁洋などについて仔細に検討している。

第五章は、金堡を中心として、遺民僧の文学思想についての考察。第六章では、明末に発展した戯曲小説などの通俗文学と仏教について論じている。

仏教が中国知識人の精神や文学に与えた影響は広くかつ深い。しかし、仏教学はそれ自体、壮大深奥な思想体系と膨大な文献の蓄積とを持つ世界であり、中国文学プロパーの研究者がこの分野の研究に着手することは容易ではなかった。本論文は、これまで誰も手をつけることができなかつた標記のテーマについての、はじめての本格的な論文であり、その成果は高く評価することができる。

創見に満ちる本論文の中でも、復古の理論を掲げた古文辞派の考え方の根底に嚴羽の『滄浪詩話』をはじめとする宋代の文芸理論があり、「妙悟」を説く仏教思想があったことの指摘、錢謙益を論じて、彼が同じく仏教といっても唯識学に基づき、作者の意識や心理的側面に着目した詩学理論を構築した点の指摘などは、とりわけ出色である。

審査の席上では建設的な立場から、(1) 仏教に関して今ひとつ正確な知識が要求されるであろうこと、(2) 引用原文の日本語訳にも今ひとつの正確さが要求されるであろうこと、(3) 儒学と仏教の関係について、より厳密な考察が要求されるであろうこと、(4) 明末清初の思想や文学に仏教が与えた影響を広く捉えようとしているが、それはややもすると現象の羅列に終わる危険にもつながり、個別の対象により深く踏み込んだ考察も要求されるであろうこと、などの指摘がなされた。だがそれらは、本論文において解明された明末清初の文芸思潮における仏教の多面的なかわり、その重要性についての論証をそこなうものではない。よって本委員会は、本論文が博士（文学）の学位に十分値するものであると判断する。